

日本語教師という仕事に関心を持つみなさまへ

KJLPT（文部科学省日本語教師養成・研修推進事業拠点整備事業・近畿ブロック）の第1回公開シンポジウムに外部評価委員として参加した、国立国語研究所／総合研究大学院大学の松下達彦と申します。朝一番に学生のみなさんのポスター発表を聞き、とても頼もしく思いました。ぜひ「このまま」日本語教育の沼にズブズブとはまってほしい（笑）と思っております。

冗談めかして言いましたが、少しまじめに、少し長くなりますが、以下3点に分けて、特にこれから社会に出ようという若いみなさんに“応援メッセージ”をお送りしたいと思います。

1. 希望と気概をもって日本語教育の世界へ

私が日本語教育の世界に入った1990年代初めは、日本の経済や技術の発展に関心を持つ人が多く、日本語学習動機も大半はビジネスやテクノロジーでした。その後、日本経済は長期低迷の時代に入りましたが、その間も日本語学習者や留学生は増え続けてきました。その間、学習動機はアニメ、マンガ、J-POPなどのポップカルチャーを中心とした、文化や社会への関心全般になってきました。一方、少子高齢化に伴い、10年ぐらい前から労働力の不足が顕在化し、良い悪いを抜きにして、経済的にも労働力の受け入れ増大が避けられない現実になっています。

そうになっている以上、受け入れの前線にいる日本語教育関係者は、より人間的かつ効果的な（その二つが矛盾しないような）日本語教育の方法を模索していかなければならないと思います。人間的な教育と効果的な教育は、ともすると対立するもの捉えられがちなのですが、両方を追求する必要があると思います。人間的、という部分ですが、言語教育の現場にいと、ことば以外のところにも目が向くことが多々あると思います。言語やコミュニケーションを超えた部分についても関心を持ち、適切な支援関係者につなぐ力をもって欲しいと思っています。（言いたいのは「やりがいのある仕事です」ということです！）

今後も、経済や政治の影響を受けながら、学習者数は増減するかもしれませんが、文部科学省の方がおっしゃっていたように、大きなトレンドとしては当分増え続けるのではないかと考えられます。お医者さんや小中学校の先生、介護人材や保育士、IT技術者、ドライバーや農林漁業の後継者など、世の中、人材不足の分野だらけになっていますが、日本語教師も間違いなく人材不足の分野です。もちろん大変な部分もあるが、やりがいもあり、毎日のように様々な発見があり、文化や国境を越えた交流のある、楽しい分野でもあります。若いみなさんには、就職できるかどうかといった心配をしすぎないようにして、むしろ自分が「社会を支える」のだという気概を持って勉強してほしいと願っています。

念のために行っておきますと、仮に日本語教師にならなかった（なれなかった）としても、言語教育の勉強というのは「つぶしが利く」（勉強したことがいろいろ役に立つ）分野です。様々な分野とのつながりや広がりを目を配りながら、迷うことなく、勉強を続けてほしいと思います。

2. 「深さ」と「広さ」を備えた教師を目指そう

上にも述べましたが、日本語教育は学際性の高い、とても幅の広い分野です。しかし、就職して

より良い仕事をしていくためには、日本語教育に関わる諸分野の中でも、特に強い分野を作るとよいと思います。私は長い間日本語教育プログラムのコーディネータをやってきましたが、同じチームの中には、初級レベルで会話を教えるのが上手な先生もいれば、上級レベルで読解や作文を教えるのがうまい先生もいます。オールラウンダーが理想ですが、まずは自分の強みをみつけるのがよいでしょう。例えば、私の場合は学生時代に中国に留学していたこともあり、初めに漢字語に興味を持ち、そこから、語彙の学習と教育、言語習得における第一言語の影響などに力を入れて勉強してきました。学生のみなさんの発表にも、それぞれの強みの「芽」が表れていて、頼もしく感じました。

「広くて深い」知識を持つのが理想だと思う一方で、なかなかそれは難しいとも思います。「深くて狭い人」と「広くて浅い人」を比べたら、どちらが言語教師に向いているでしょうか。・・・私はどちらかと言えば後者、すなわち「広いが浅い人」のほうが向いていると考えています。言語教育は言語、心理、社会、教育などの分野が関わるのはもちろん、哲学、文学、経済、情報科学、脳科学などもかかわっています。日本語教師をしていると、茶飲み話も、コンピュータのマニュアルを読むことも「日本語」という枠でくくられますので、教える必要が出てきます。また、毎日の授業の中では、さまざまなトピックが出てきます。社会的、文化的問題について考えなければならぬことが多いですし、学習者は日本や世界について深く知りたいと思っており、様々な質問をされます。

ですので、日本語教育に直接に関わる分野だけではなく、毎日の国内外の状況について、バランスの良い知識を身に着ける努力をしてほしいです。特に、格差・貧困、移民・難民、環境、戦争や紛争といった地球規模の問題、生成 AI、遺伝子操作やクローン、宇宙開発などの技術の進展に伴う問題にも関心を持って勉強してほしいと思います。

最近、新聞を読まない人が増えていることを憂慮しています。新聞の良いところは、「興味はなくても重要なこと」が丁寧に書かれていることです。バランスの取れた情報を取り入れて、「この社会をどうしていったらよいのか」を教師が考えていなければ、それは学習者にも伝わらないし、それを教師がまじめに考えていれば学習者には伝わります。世の中をよくするために、世界中の様々なところで、様々なところから来た人と、「より良い世界 better world」について議論できるような教師になってほしいと願っています。

3. 日本語教育の仕事は、教室の中だけにあるわけではない

どのような仕事も社会文化的なコンテキストの中にあります。学習者も経営者も教師も社会文化的なコンテキストの中にいます。

例えば、所属する機関のもつミッションや方針についても（批判的に）考える必要があります。なぜそこでは、そのようなミッション、方針になっているのか、それは妥当か、さらに良くしていくことはできないか、考えてみてほしいです。自分の中にある「軸」を、所属するチームや機関やそれを取り巻く環境の中に置いて、自分はどのようなスタンスで、どんな目標をもって仕事をするのか、「長いものに巻かれることなく」考えてほしいと思います。

学校といえども経済状況と無縁でいられるはずありません。与えられたリソース（ヒト、モ

ノ、金、情報など)をどう活かして、どうカリキュラムをつくり、どう実施し、評価するのかを、経営者やコーディネータはもちろんですが、現場教師もいっしょに考えられるようになってほしいと思いますし、さまざまな管理・運営の業務も、日本語教育関係者の重要な仕事です。「手前みそ」ではありますが「[言語教育プログラム可視化テンプレート](#)」を開発してダウンロードできるようにしてありますので、ぜひ利用してほしいと思います。

教育現場は他の教職員と協力しなければならないことがたくさんあります。重要なのは良いチームを作ることです。自己主張するだけでもいけませんし、ただ黙って従うだけというのもおかしいと思います。共通の目標を確認して、その目標に向けて議論する文化を作ることが必要です。周囲を尊重しつつ、自分が正しいと思うことを主張しながら、議論をし、間違っていたと思ったら他者の考えも受け入れながら進歩してほしいです。

日本国内で日本語教師をする場合は、学習者はみな言語的マイノリティです。社会文化的にもマイノリティ性を持っています。日本語教師は、時には学習者の代弁者とならねばなりません。広い視野と高い協働能力を持ち、「優しさと強さを兼ね備えた先生」になってほしいと思います。